

あの頃の風景

おくのほそ道 第15回

おくのほそ道 「むすびの地」



株式会社建設技術研究所/地球環境センター
松嶋 健太 MATSUSHIMA Kenta (会誌編集専門委員)



① 戦災後復元された現在の大垣城

元禄2(1689)年3月(新暦5月)に江戸深川を発った松尾芭蕉は、おくのほそ道の「むすびの地」である大垣に同年8月21日(新暦10月4日)入った。

一度は離れた弟子の曾良や露通、以前から交流のあった大垣の門人たちとの邂逅があり、旧交を温めあうなど大いに歓待されたことが記されている。芭蕉の大垣来訪はこの時が前年に続く3回目であり、船問屋を営む門人である谷木因邸に宿泊し、近藤如行らと連句を残すなどしている。

全行程約2,400km(約600里)に及ぶ長旅の疲れから、一時は床に臥せたこともあったようだが、門人である竹戸のあんまで快復し、9月6日には船町湊より木因の船で伊勢神宮を目指して出立した。

生涯に4度訪れるなど、芭蕉が愛した大垣は水の都と

して知られ、環境省の「平成の名水百選」に選定された加賀野八幡神社の井戸など、自噴する湧水に恵まれた土地である。これは木曾川、長良川、揖斐川の木曾三川の伏流水の集まる全国有数の自噴帯にあるため、かつては各家庭に自噴泉があり、24時間流しっぱなしの水槽で毎日野菜や果物を冷やしていたとのことである。

このように水に恵まれた大垣には、揖斐川をはじめとする15本の一級河川が流れ、この地に築かれた大垣城もこの豊かな水を利用した4重もの水堀に囲まれた平城である。加えて美濃路の要衝でもあったことから、江戸時代を通して城下が発展し、それに伴って町人の町である町屋も広がりを見せた。この町屋の一つであり、美濃路沿いに発展した船町では、堀の水を集めた水門川を南下し、揖斐川を抜け、桑名湊にでる水運が発達し



④(右) 大正末期の赤坂湊

⑤(下) 史跡として整備されている現在の赤坂湊



②(上) 現在の船町湊

③(左) 舟運で賑わう大正時代の船町湊



ていった。

桑名湊からは廻船によって、江戸や大阪に輸送できたため、この地の産物である米や菜種油、清酒などの移出に、陶器や海産物などの生活物資の移入に利用された。これらを中心的に担ったのが船問屋であり、船町湊では壺屋と木因の生家である谷家の2軒がほぼ江戸時代を通して務めた。谷家は間口約36m(19間4尺9寸)、奥行約51m(28間)の屋敷を構えるほどの問屋であったが、木因が九太夫として谷家三代目の家督を相続した時には零落していた。九太夫は家の再興に尽力し、江戸船2艘、川船7艘を保有するまでに至った。

大垣の舟運は明治時代以降も続き、明治14(1881)年頃の船の所有状況でも水門川筋の船町で合計48艘、杭瀬川筋の赤坂村で8艘、揖斐川筋の三村(津村、平

村、大村)で6艘などの記録がある。さらに時代を下ると、蒸気船が運行され人や物資の輸送を担った。明治17(1884)年に設立された大垣乗船会社の運航記録では、大垣を8時、11時、20時の3回出港し、20時の便は桑名に翌朝7時に着く夜行便であったようだ。

これらの舟運の拠点の一つが船町湊であり、芭蕉はこの湊から木因の持ち船で水門川を下り、揖斐川に出て伊勢を目指した。その時の別れを惜しみ『蛤のふたみに別れいく秋ぞ』の句で結んだ。

<参考文献>

- 1) 大垣市編(2013)『大垣市史 通史編 自然・原始～近世』大垣市
- 2) 大垣市編(2014)『図説 大垣市史』大垣市
- 3) 郷土出版社編(1983)『写真集 思い出のアルバム 大垣』郷土出版社

<写真提供>

- ①②⑤ 筆者 ③④ 大垣市